

岩手医科大学附属病院の移転に係る跡地活用について

平成 28 年 2 月 15 日
市 長 公 室
都 市 整 備 部

1 岩手医科大学総合移転計画について

岩手医科大学は創設以来、建学の精神のもとに、医師の養成機関として多くの良医を輩出し、研究機関のみならず、県民医療の中核施設として、県民の保健医療を支えて今日に至っている。

一方、近年、ますます増大かつ多様化する医療需要への対応や高度・特殊医療への対応要請が高まる中で、同大学も大学病院としての機能の維持・向上に努め、施設の拡充や機器の整備を図り対応してきたところではあるが、教育・診療・研究の根幹となる盛岡市内丸地区の大学施設及び附属病院は、各施設とも築後相当の年数経過により建物の老朽化が著しく、また、敷地面積も狭隘で慢性的な交通渋滞を引き起こしていることから、これ以上の施設の増改築や新規拡充を望むことが困難な状況にあり、早急にこの問題の解決を図ることが緊急課題とされていたことを受けて、「平成 14 年に矢巾町への全面移転を決定」し、36ha の用地を取得している。

以後、矢巾キャンパスへの移転整備計画を進める中で、「第一次事業」では、薬学部の新規開設とともに、本町地区にあった教養教育課程(医・歯学部 1 年次)を共通教育センターとして移転整備(平成 19 年)するとともに、続く、「第二次事業」では、基礎部門及び共同研究部門の機能移設と臨床部門を除く医・歯学部の移転整備(平成 23 年)を完了している。また、臨床研究機器としては世界初となる超高磁場 7 テスラ MRI 研究施設を整備するなど、医学・歯学・薬学と基礎・研究部門を横断的・学際的に結ぶ高度教育研究機関としての位置づけを強化し、世界に発信する医療系総合大学としての素地を固めてきている。

現在は、当該整備計画の総仕上げとなる矢巾新附属病院の早期完成に向けた取組を進めており、「平成 28 年 3 月には新病院に先駆けてエネルギーセンター棟が完成」とともに、「平成 28 年度内には病院本体工事の着工」を予定しており、これから附属病院移転に向けた各種工事が本格化していく予定である。

また、内丸地区については、平成 31 年の附属病院移転後には、盛岡市中心部の利便性を最大限に生かした外来機能中心の「内丸メディカルセンター(仮称)」を開院する予定であり、建物については、当面は既存施設の一部を利用していくこととしているが、将来的には、移転跡地の再開発計画とも併せて、新棟整備を検討していくこととして計画を進めている。

2 跡地活用に係る検討経緯について

日付	会議名	主な内容
平成26年5月29日	第1回/四者事務連絡会 *1	・今後の進め方について
7月7日	第2回/四者事務連絡会	・医大の事業工程の見直しについて
11月6日	第3回/四者事務連絡会	・跡地利用検討資料（初案）の確認
平成27年2月5日	第4回/四者事務連絡会	・跡地利用検討資料（修正案）の確認
5月11日	第5回/四者事務連絡会	・検討状況及び今後の進め方について
6月8日	第1回/ワークショップ	・跡地を活用したまちづくりを考える①
7月23日	第2回/ワークショップ	・跡地を活用したまちづくりを考える②
9月1日	第3回/ワークショップ	・跡地を活用したまちづくりを考える③
9月25日	第6回/四者事務連絡会	・WS結果報告及び今後の進め方について
12月3日	第1回/跡地活用検討懇話会 *2	・これまでの経緯及び検討状況について ・意見交換
平成28年2月5日	第7回/四者事務連絡会	・第1回跡地活用検討会議の開催について
2月24日	第1回/跡地活用検討会議 *3	・これまでの検討状況について ・意見交換

*1 「四者事務連絡会」～岩手県、盛岡商工会議所、盛岡市、岩手医科大学の部長・課長等により構成される事務連絡会

*2 「跡地活用検討懇話会」～学識経験者、地元企業・町内会・商店街、医師会、教育福祉産業部門の有識者により構成される懇話会

*3 「跡地活用検討会議」～岩手県副知事、盛岡商工会議所会頭、盛岡市長、岩手医科大学理事長により構成される会議

3 内丸地区と岩手医科大学の歴史

(1) 藩政時代

盛岡城は、南部信直・利直により築城され、内曲輪には、本丸、二ノ丸、三ノ丸、腰曲輪などが設けられ、花崗岩を用いた雄大な石垣が構築されている。内曲輪の北側には、藩主の屋敷である御新丸のほか、南部氏一門や重臣などの屋敷が集められた外曲輪が存在し、北氏、中野氏、毛馬内氏、東氏、江刺氏、八戸氏らの屋敷が存在していた。

現在の岩手医科大学は、八戸氏の屋敷付近と想定され、中世に福士氏の慶善館が所在した地に建築されている。

(2) 明治期

岩手県の初代県令の島惟清が、明治5年に県直営の勸業場の整備と西欧式の大規模畜産農業を目指した牧場事業を開始した。

盛岡城の跡地は、明治39年に、近代庭園の祖といわれる長岡安平の設計により整備事業に着手し、同年9月15日に岩手公園として開園している。

明治43年に盛岡地方を襲った豪雨により、中津川、北上川が氾濫し、上ノ橋、中ノ橋、明治橋が流失する大被害があり、翌年に中津川の護岸工事が始まり、大正元年に中津川の石組護岸工事が竣工した。

また、明治44年には辰野金吾と葛西萬司の設計による旧盛岡銀行本店本館が建設されており、内丸地区は、花崗岩の石垣護岸と川の流れ、鉄の欄干の中ノ橋、煉瓦造の銀行が情緒ある景観を形成する地区となった。

岩手医科大学は、明治30年に創設者三田俊次郎によって、厚生済民の理念のもとに「私立岩手病院」として開設されており、平成29年には開設120周年を迎えるものである。

(3) 大正～昭和初期

大正期になると、交通網が整備され、まち並みや商工業の近代化が進んでいく。昭和2年に、昭和天皇のご成婚を記念して建築工事が進められていた佐藤功一の設計による岩手県公会堂が落成し、昭和3年には昭和天皇を迎え、公会堂を大本営にして陸軍特別大演習が観武ヶ原を中心に繰り広げられた。

また、同年に、南部土地(株)が、菜園地区を整備し、翌年には大通りとこれに交差する現在の映画館通りが整備されている。

岩手医科大学は、大正15年に、葛西萬司の設計により岩手病院本館が鉄筋コンクリート造で新築開院となった。この建物は盛岡市内に現存する最古の鉄筋コンクリート造の建築物である。

(4) 戦後～現代

盛岡市の中心市街地復興は、戦災による被害が比較的少なく、県庁所在地であることに加え、国の出先機関や民間の支社・支店等が集積していることが幸いした。昭和27年には北村徳太郎（元東京大学教授）が、「盛岡市公館地区計画案」として、岩手公園の整備内容に加え、周辺の官庁等建築物の配置について提案しており、昭和31年の都市計画決定に基づく岩手公園の開設、昭和32年に全国第1号の認定を受けた「官公庁一団地計画」の基礎となっている。

昭和30年代後半から中心市街地の再開発が加速し、昭和35年には盛岡バスセンターが開業するとともに、大通商店街がアーケード化されている。

昭和36年には県立中央病院が上ノ橋際に新築落成、翌37年には県産業会館（サンビル）や岩手日報社新社屋、盛岡市庁舎が、昭和40年には岩手県庁舎が落成するなど、現在に近い中心市街地の姿に変貌した。

その後、高度経済成長やモータリゼーションの進展などを経て、昭和57年に盛岡白百合高等学校が、昭和62年に日本赤十字病院及び県立中央病院が、平成18年に県立図書館が、平成23年に盛岡地方法務局が、内丸地区から移転していくこととなった。

岩手医科大学は、昭和30年代には、西病棟、医大ホールが整備され、40年代には、歯学部棟や中病棟、記念図書館、地下駐車場、50年代には、高次救急救命センター、平成期には、MRI棟や循環器医療センター、PET・リニアック先端医療センターが整備されて現在に至っているものであり、内丸地区における総合病院として、昭和から平成に渡り、一貫して医療機能の充実に努めてきているものである。

4 内丸地区と岩手医科大学の現状と課題

(1) 都市機能の集積

内丸地区における都市機能の集積については、岩手県庁や盛岡市役所などの行政機能が「一団地の官公庁施設」として集積しているとともに、岩手医科大学などの医療機能、県民会館や公会堂などの文教機能、岩手日報社やテレビ岩手などの報道機能、東北銀行や岩手銀行などの金融機能などが集積している。

さらに、周辺地区を見ると、商業や業務、交通、福祉、居住機能などが集積しており、まさに県都盛岡の中心部として、様々な都市機能が集積するとともに、活発な社会経済活動が行われている地区であり、岩手県における都市活動の中枢を担っている地区である。

また、盛岡城跡や中津川、古くからのまちなみなどの歴史・自然・文化を有し、毎年多数の観光客や修学旅行生徒が訪れるという観光機能も担っている地区である。

(2) 建築物の老朽化

内丸地区における建築物の老朽化については、岩手県庁が50年、県議員会館が50年、岩手県水産会館が49年、盛岡地区合同庁舎が46年となっているとともに、盛岡市役所が53年、北日本銀行が54年、岩手日報社が53年、東北銀行が52年であり、いずれも建築後約50年を経過し、近い将来において建替などを余儀なくされる状況となっている。

(3) 施設の移転

内丸地区においては、昭和40年代には概ね現在の姿となったものであるが、その後の社会経済状況の変化やモータリゼーションの進展、ライフスタイルの変貌などに伴い、内丸地区から他の地区へ移転する施設がみられるようになっていった。

代表的なものとしては、昭和57年に「盛岡白百合学園高校」が山岸地区へ移転し、跡地には中ノ橋通一丁目にあった「盛岡中央郵便局」(昭和59年)が移転・立地しており、その跡地には「プラザおでって」(平成12年)が整備されている。

また、昭和62年には「盛岡赤十字病院」が三本柳地区へ移転し、跡地には「岩手銀行本店・別館」と「岩手医科大学附属循環器医療センター」(平成9年)が立地している。同じく昭和62年には「岩手県立中央病院」が上田地区へ移転し、跡地は「緑の広場」として現在に至っている。

その後、盛岡駅西口地区及び盛岡南地区の開発が進む中において、平成18年には「岩手県立図書館」が盛岡駅西口地区のアイーナへ移転し、跡地には「もりおか歴史文化館」(平成25年)が整備されている。

平成23年には、国の「盛岡合同庁舎1号館」が盛岡駅西口地区の「国・盛岡第二地方合同庁舎」へ移転し、跡地は更地のままとなっている。

また、平成28年には「盛岡中央消防署」が盛岡駅西口地区へ移転することとされており、跡地の利活用については、今後の課題とされている。

そして、平成31年には、矢巾町において新たな「岩手医科大学附属病院」が開業することとなり、内丸地区においては、当分の間は既存の「中病棟」を主体とする「メディカルセンター」を設置・運営し、外来患者や初期救急患者に対応することとしているが、将来的には、既存の循環器医療センターを含めて、現在の歯学部棟がある場所に、新たな「内丸メディカルセンター」を整備することとしており、その結果として、岩手県庁直近に約2haの跡地が生まれることとなる。

(4) 内丸地区の課題

内丸地区及び周辺地区は、藩政時代からの政治の中核であるとともに、時代の流れの中において、医療、文教、報道、金融、商業、業務、交通、福祉、居住、観光機能が集積してきた地区として、今後とも、岩手県における社会経済活動の中心となっていくべき地区である。

一方で、各種施設の老朽化が進行していることから、今後の内丸地区における各種施設の更新においては、従来の都市機能の確保を図るとともに、より適切な機能配置を行っていくことが求められている。

また、様々な都市機能が集積する都心地区としての自動車やバス、自転車等の交通対策も求められている。

さらに、盛岡城跡や中津川などを生かした新たな魅力づくりも考慮していく必要がある。

なお、今後の内丸地区にあるべき機能のキーワードとして、国際都市、国際リニアコライダー（ILC）、仙台に次ぐ東北の拠点都市、広域連携、地方創生、県都、中心市街地活性化、都市機能の立地適正化、都市防災などが挙げられる。

5 跡地利用に関する意見について

跡地活用の考え方については、これまで、四者の若手～中堅職員によるワークショップや、学識経験者、地元企業、地元商店街等の委員で構成された跡地活用検討懇話会を開催するなどして、広く意見を聴いてきたところである。

(1) ワークショップでの意見

(テーマ①) 内丸地区の長所、良い所

- ・ 中津川で鮭の遡上が見られるなど自然が豊かなこと。
- ・ 盛岡城跡公園や桜山周辺、公会堂など歴史や文化が感じられること。
- ・ 石割桜、さんさ踊り、チャグチャグ馬っこなどの観光・祭事があること。
- ・ 行政や金融・医療機関などが集約されており、街がコンパクトであること。
- ・ マンションや飲食店が多く、公共交通機関を含め住環境が整備されていること。

(テーマ②) 内丸地区の課題、直したい所

- ・ 駐車場が少なく、道路が狭いため交通渋滞が多いこと。
- ・ 老朽化した建物や空き地が多く、古い官庁街のイメージであること。
- ・ 郊外に人が流れ、若者やこどもが少なく、週末人口も減少していること。
- ・ 観光行事が単発的であり、観光サイト等との連携不足が課題であること。
- ・ 商業施設や運動施設、宿泊施設が少ないこと。

(テーマ③) 長所を伸ばすためにはどうすればよいか。

- ・ 中津川・盛岡城跡公園・桜山界限での各種イベントや案内図の作成
- ・ 若者が集える街づくり、リノベーションの推進、魅力の情報発信
- ・ 駐車場の整備、交通手段の充実、バスセンターの整備
- ・ 高齢者住居の充実、医療アクセス・住環境の良さをPR
- ・ 貸自転車の活用、都市型産業の起業促進、社会起業家の育成

(テーマ④) 課題を解消するためにはどうすればよいか。

- ・ 公共交通の利用促進、レンタサイクルやバス停の充実、徒歩者への配慮
- ・ 歴史ある建物内外装の修理・装飾、緑地ゾーンの整備・充実
- ・ 若者支援、若手起業家の育成、高齢者が活気づく機能の整備
- ・ 運動施設の充実、図書館・学習スペース、合宿可能な施設の整備
- ・ 年間を通して観光行事が体験できる施設の整備、若者が集まるイベントの開催

(テーマ⑤) 医大跡地にどのような機能及び施設を配置するか。

(機能)

- ・ 人材育成・交流拠点、公共交通の拠点、観光・各種イベントの情報発信
- ・ 行政や金融、医療機関の集中化、防災都市としての機能整備
- ・ 働く場の充実、観光・食関連企業のインキュベーション、社会起業家大学
- ・ 子育て・女性の就業支援、
- ・ 高齢者の健康増進、若者が活動できる場所、文化・歴史を学べる場所
- ・ ユニバーサルデザイン

(施設)

- ・ 起業家向けコワーキングスペース・シェアオフィス
- ・ 塾・学校、学童・保育所、インターナショナルスクール
- ・ ILC 研究ラボ、ILC 科学館、国際コンベンション施設、図書館・学習スペース等
- ・ 行政機関、ソフト系企業、新しい市役所
- ・ 駐車場、バスセンター、レンタサイクル
- ・ 高齢者住宅、フィットネス・運動施設、緑地ゾーン、ピアホール、屋台村など

(2) 跡地活用検討懇話会での意見

- ・ 跡地活用の議論に当たっては、大きなテーマ設定が必要であり、コンセプトとして、健康や福祉、未来、教育、人材育成、人材交流などが挙げられること。
- ・ 空間をデザインしていく上で、彩りをつくっていくことは非常に重要であり、観光の面から見ても、また立ち寄りたいたいと思う場所が必要であること。
- ・ 必要な施設の具体案も示され、子供から大人、お年寄りまでが利用でき、仕事、居住、医療、遊びなど、多彩な機能が融合した複合的な施設が望ましいこと。かつ、地元企業や商店街との調和や協働にも配慮が必要であること。
- ・ 内丸地区における救急医療体制、矢巾との関係、交通網の整備、内丸以外の周辺地区との連携についても併せて検討が必要であること。

(3) 跡地活用に関するこれまでの意見

跡地活用の考え方に関して、現状や課題等を踏まえ、これまでのワークショップや懇話会等で出された意見を取りまとめると次のとおりとなるが、今後、この意見も参考としながら、平成 28 年度以降、更に検討を行うものである。

①都市機能

行政、金融、医療、福祉等の機能集約、国際都市や防災都市としての機能強化、都市型産業の起業支援

②交流拠点

若者から大人まで世代間の人材交流や国際交流をテーマとして、多彩な機能が融合した複合施設やコンベンションホール等の整備

③教育・文化

歴史的建造物の有効活用、ILC関連施設などの国際的機能、図書館や学習スペースなど子供から大人までが学べる場所

④住環境・健康

高齢者に優しい環境、公園・緑地・運動施設・健康増進施設の整備、子育て・女性支援制度の充実、医療・福祉の充実

⑤自然・観光・イベント

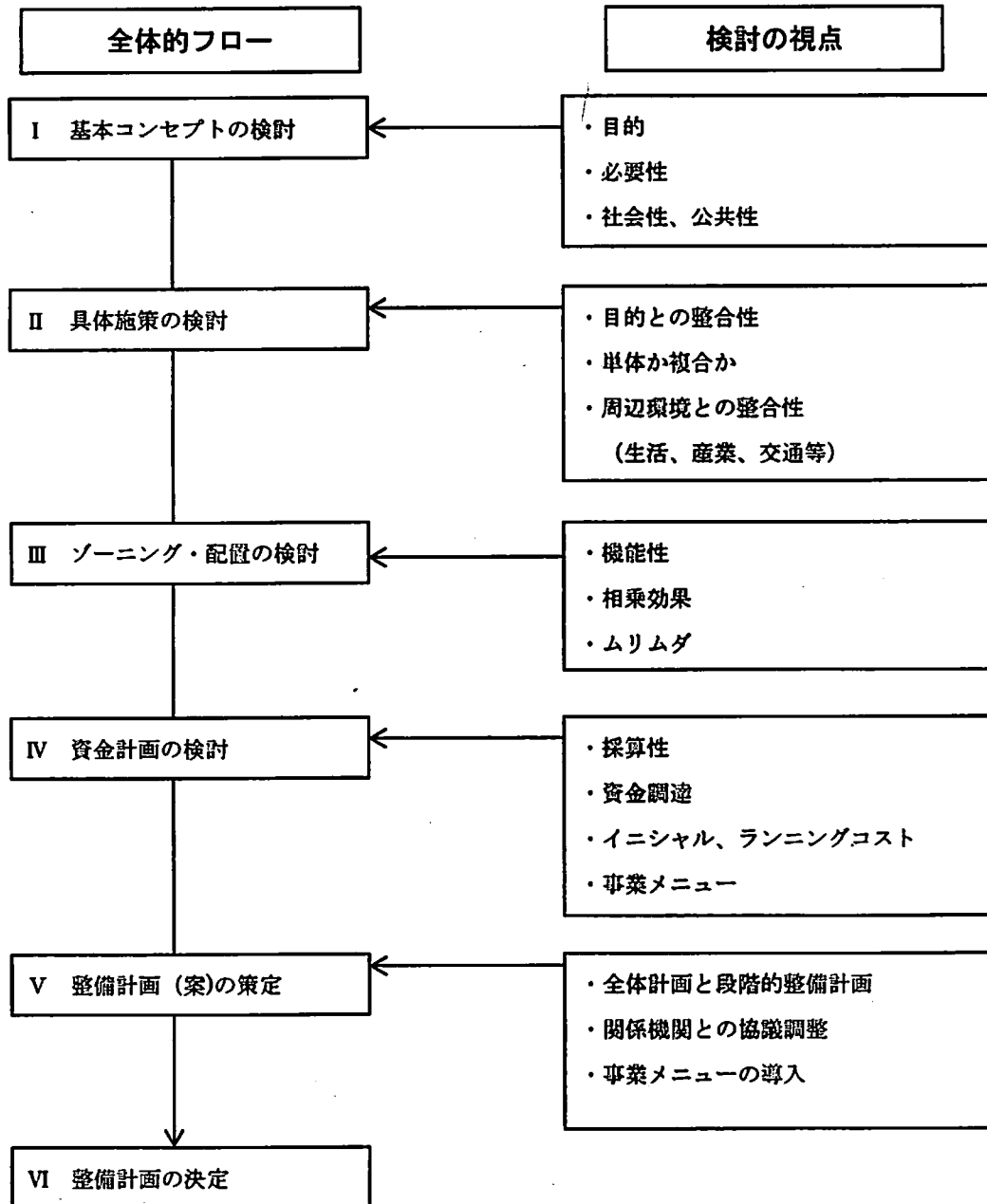
盛岡城跡公園や中津川、桜山界限の各種イベント、観光PR機能の強化、年間を通して観光行事が体験できる施設の整備

⑥交通

公共交通機関の拠点（ハブ機能）、駐車場の整備、歩行者・自転車への配慮、国際的な案内表示

6 平成 28 年度以降の取り組みについて

(1) 全体の検討フロー



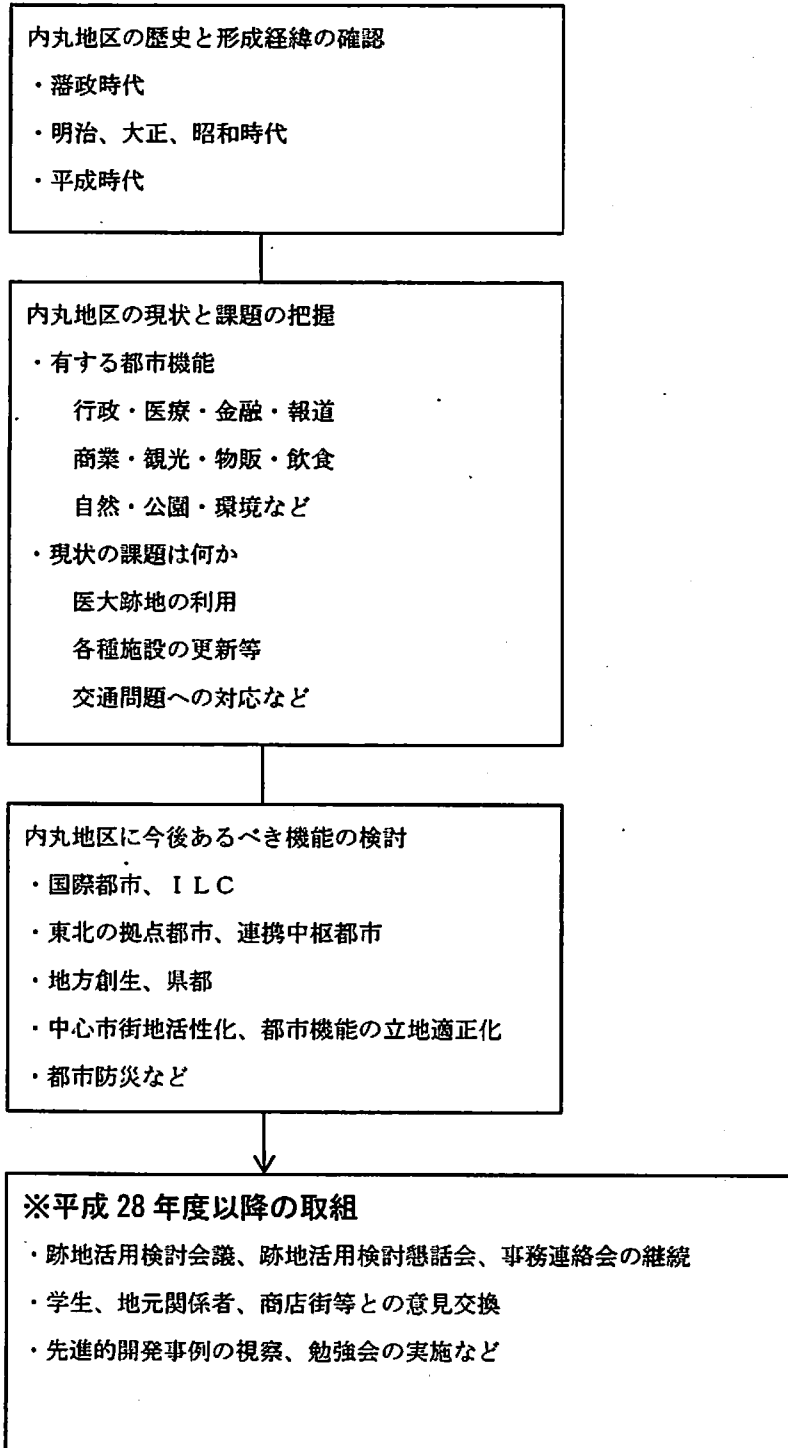
■年次予定

※平成 26～28 年度 : 「基本コンセプトの検討」の実施

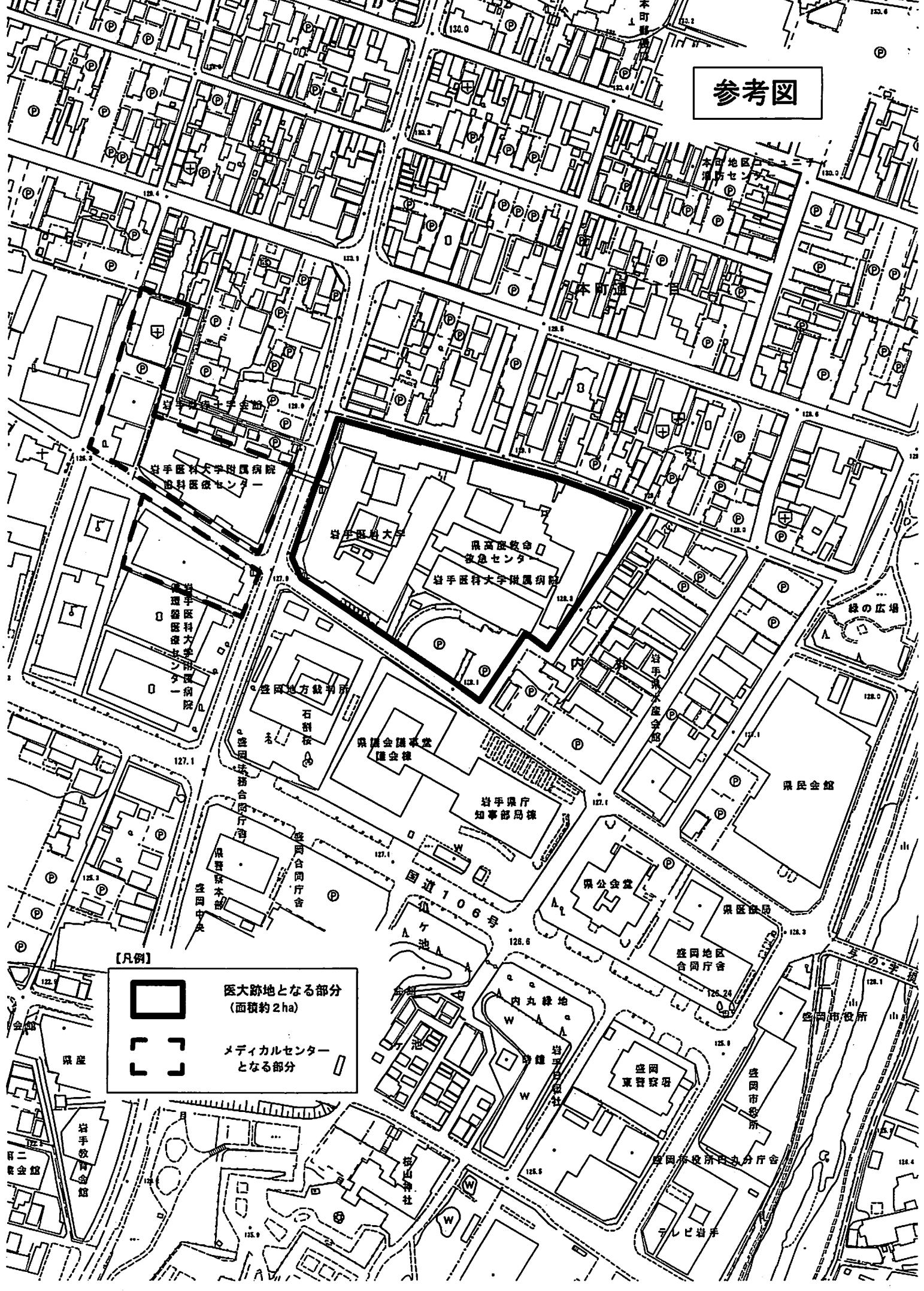
※平成 28～30 年度 : 「具体施策の検討」「ゾーニング・配置の検討」「資金計画の検討」「整備計画 (案) の検討」を実施

※施設整備については、さらに後年度となるとともに、段階的整備も考慮する必要がある。



(2) 基本コンセプトの検討について



参考図



【凡例】

	医大跡地となる部分 (面積約2ha)
	メディカルセンター となる部分

岩手医科大学附属病院
岩手県立病院

岩手県立大学

岩手県立医療センター

岩手医科大学附属病院

岩手医科大学
附属病院

盛岡地方裁判所

盛岡会議事堂
議事棟

岩手県庁
知事部局棟

県民会館

盛岡合同庁舎

盛岡合同庁舎

国道106号

県公会堂

盛岡地区
合同庁舎

盛岡地区
合同庁舎

盛岡市役所

盛岡
東警察署

盛岡市役所
北分行舎

テレビ岩手